ふくここ

2017年度 Vol.4　3月特別号

ふくしま心のケアセンター　県北方部ニュースレター

ふくしまから はじめよう。 Future From Fukushima.

ご挨拶

いつも「ふくここ」をご愛読いただきありがとうございます。春の足音が静かに聞こえてくるこの季節、東日本大震災に様々な思いを寄せていらっしゃる方も多いのではないでしょうか。ふくしま心のケアセンターも、平成24年の開設から6年の歩みを数えました。この度、被災者・支援関係者の皆さまと共に歩んできたこの6年と、東日本大震災からの7年を振り返りながら、未来に向けたより良い支援を創りあげていくために、特別号を発行いたします。最後までお読みいただければ幸いです。

県北方部センター　方部課長　松田聡一郎

当　時　と　今

震災が起きてから、その当時と今の変化を身近な視点から比べています。

二本松市内にある復興公営住宅（石倉団地）の写真です。震災前は農地だったところに建設されています。復興公営住宅が徐々に完成し、仮設住宅や借り上げ住宅等から住まいの場を移して生活されている住民も多く、新たなコミュニティが形成されている状況です。

ＪＲ東北本線藤田駅の震災直後と現在です。
震災直後、入口の柱が土台から外れ危険な状態になり立ち入り禁止になりました。

いわき市にあるいわき・ら・ら・ミュウの震災直後と現在です。
左側の写真が津波の威力を物語っています。

郡山市役所です。展望台が崩壊するなど、建物に大きな被害をもたらしました。
私が平成 24 年に所属していた県中方部センターは、この市役所のすぐ隣でした。毎日、改修のための槌音が響いていたのを昨日のように思い出します。

※写真：『東日本大震災－郡山市の記録－』 平成 25 年 2 月,郡山市

それぞれにとっての震災とは

今年 2 月に、県北方部センター内で、震災からこれまでの歩みについての座談会のようなものを行ないました。当センターの職員が、どんな道のりを歩み、どのような思いで業務に従事しているのかが垣間見えるかと思います。

①3.11 当時は？

佐藤：4 か月児健診をしていました。掃除用具入れを倒れないように押さえてたのを覚えています。母子に怪我がなかったので良かった。ガラスの近くに行かないよう、安全な場所に避難させて、健診に来ていた子どもと手をつないで下に降りて、芝生の所でみんなで落ち着くのを待ちました。

羽田：自分も同じような感じ。医大の外来プレイルームにいました。戸棚がバーンと開いて。そこが開かないように押さえていました。その後皆を避難させて、医大の前に雪が降る寒い中皆と一緒にしゃがんでましたね。

塩田：小高赤坂病院。総合リハビリテーション室にいたときに。同じく避難してる時に雪が舞って。このままじゃダメだってことで、暖の取れる部屋に皆で集まって。そこで一晩過ごしましたね。

畑山：私だけ県外でしたね。千葉県の小学校で介助員をしていました。当日は子どもたちも時間的に帰ってる子がほとんどで、私一人で教室にいました。とっさに机の下にもぐったけど机が古くて…。廊下に出たら壁は崩れていて、グラウンドは地割れしていました。子どもたちを帰してから職員室に集合して、解散になったけど、何が起きてるのかわからなかった。駅のモニタに津波の映像が映っていて…。

②自分たちにとっての震災とは

松田：この 7 年。長かったのか短かったのかわからない。地震としては 2 分くらい。あれでこの影響。一時は思い出したくもない時期があったよ。もう震災の話はいいやって。

塩田：否応なしに情報は入ってきますけどね。天気予報の後に放射線量が出てきて。感覚が麻痺してきますよね。

松田：この 7 年は言語化できないな、まだ…。外側からは見れないな。県外に行ったら福島のことは距離を取って見れるけど、時間の軸は見れない。

畑山：県外から来た病院の先生が、福島の新聞には震災関連の記事が載らない日はないと話していたけど、他の都道府県は記憶が大分薄れている。私はここにいる 2 年しか（福島を）知らないけど、さっきの震災当日の話を聞いて、（新たに）知る部分もありました。地震は止まれば終わるけど、今回はそこから津波が来たわけじゃないですか。想像するだけで恐ろしいし、福島の人はそれだけでなく、放射能の問題もあって、想像してもわからない所があります。

羽田：同じ福島県内だけど、俺はずっと福島市にいたから 2012 年 1 月に震災後初めて相馬に行った。それまでは怖くて行けなかった。そこで初めて津波の被害をこの目で見て、自分も対岸の火事で見てた部分があるんだと思った。離れて見ていたかったのかもしれないし、中通りと浜通りの意識の差なのかもしれないけど、日々の暮らしが第一になっちゃったところがある。

松田：俺もそう。平成 24 年の 9 月 10 月あたりに日本精神保健福祉士協会（の支援）で南相馬に入って目の当たりにした。一番きつかったのは、訪問に行ったときに壁一面に海苔の缶が置いてあったんだよね。それ、いただいたんですかって聞いたら、それが全部香典返しだった。その時は何も言えなかったね。被災者支援はほんと、無力だなって思うところから始まった。強烈だったからね、被災した人の経験って。自分たちが到底経験していないことを経験しているわけだから。

羽田：何もできないんだけど、ただ聴くことはできる。そこだけを支えにしていたかな。

松田：何かをするというよりは、教えてもらう、自分がそばにいるだけっていうスタンスでやってて、それは良かったと思うよね。そう考えると、当時と、7 年たった今のケアの在り方は違うよね。

羽田：ケアセンターで働いてて思うのが、震災直後の直接的な被災体験っていうところから、震災の影響でこういうことができなくなってしまったとか、生活してたらこういうところが痛んできたとかしんどくなってきたとか、そういうところにシフトしていった気がしますね。だから、段々支援も変わっていって。最初は吐き出すための支援だったけど、それが段々生活を支えるというものになって、それが、その人の心の復興にいくための手助けというところに徐々にシフトしていったなと感じましたね。

③今後、個人として、ケアセンター職員として

羽田：長い人生の中でこの震災も意味があると思っている。だから、今後はこの震災で得た教訓とか経験を伝えていく人間になれればと思う。いつかまた、大きな災害や何かがあって、地域ごと避難せざるを得ない状況はきっと出てくると思う。

松田：俺もそれに近いな。PFA の講師をしたりしてるのがまさにそう。被災者支援をどうしていくのかっていうのと、次の災害に被災者支援をどう活かすかというところかな。起こることは止められないけど、こういう経験をして欲しくないなと。もっとノウハウがあればやれたことあったよなっていう思いが強いよね。

塩田：今の話からは逸れるけど、震災が起きてから仕事も環境も大きく変わって、変わってしまった事はそうなんだけど、変わったことでの良かった面、成長できた面はあるのかなと。震災があったからネットワークが広がったし、今のメンバーと会えた。多分それは震災があったからで。そのあたりを大切にしながらこれからの活動をしていきたい。

畑山：私は、被災者支援としてきたけど、この仕事の中でいろんなことに対応しなくてはいけなくて、それが自分の力にも成長にもなってきてるんだけど、これから先、また大災害があったら飛んでいきたいなという気持ちはあります。

松田：被災をした人と、そうでない人との溝が大きくなりつつある。我々はそこの間の橋渡しができる組織なのかと思ったんだよね。被災者でもなく、被災と関係ない立場でもなく語りつづけられるような組織ではいられるのかなって。

★問い合わせ先　発行元

（一社）福島県精神保健福祉協会　ふくしま心のケアセンター県北方部センター
★電話での相談　ふくこころライン　024－925－8322　福島市旭町 9－24（024－533－4161）